



宇部興産株式会社

2021 年度第 3 四半期決算説明会

2022 年 2 月 2 日

イベント概要

[企業名]	宇部興産株式会社
[企業 ID]	4208
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	決算説明会
[イベント名]	2021 年度第 3 四半期決算説明会
[決算期]	2021 年度 第 3 四半期
[日程]	2022 年 2 月 2 日
[ページ数]	29
[時間]	18:00 – 18:43 (合計：43 分、登壇：24 分、質疑応答：19 分)
[開催場所]	電話会議
[登壇者]	1 名 取締役 常務執行役員 CFO 藤井 正幸 (以下、藤井)

登壇

司会：投資家の皆様、こんばんは。本日は、お忙しい中、宇部興産株式会社の電話会議にご参加いただきましてありがとうございます。これより、取締役常務執行役員 CFO 藤井正幸より、2021 年度第 3 四半期連結決算について約 20 分間ご説明申し上げた後、質疑応答を行います。会議全体の時間は 45 分を予定しております。

電話会議を始めます前に、皆様にお断り申し上げます。これから行う説明につきまして、現時点の予想に基づく将来の見通しを述べる場合がございますが、それらは全てリスクならびに不確実性を伴っています。皆様には、実際の結果が見通しと異なる場合があることをあらかじめご了承ください。

それでは、決算説明を開始いたします。藤井常務、よろしくお願いいたします。

藤井：皆さん、こんばんは。宇部興産の藤井でございます。本日は、お忙しいところ、ご参加をいただきましてありがとうございます。

では、早速ですけれども、本日発表しました 2021 年度第 3 四半期連結決算につきまして、資料に沿ってご説明いたしますので、よろしくお願いいたします。

連結対象会社

項目	2020年度末 (A)	2021年度 第3四半期末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	66社	67社	1社	+ UBEエラストマー株式会社 + 宇高株式会社 - 山石金属株式会社
持分法 適用会社数	26社	27社	1社	+ UBE三菱セメント株式会社 (旧 C 統合準備株式会社)
計	92社	94社	2社	

3

資料の右下にページ番号が振ってございます。まず3ページのスライド、連結対象会社からです。連結子会社数ですけれども、2社増1社減で社数としては1社増ということになっております。

増減の会社を右の摘要欄にお示ししておりますけれども、増えた会社の一つはUBEエラストマー株式会社。これはこの下期から合成ゴム事業を分社化いたしまして、連結会社となったものです。

二つ目の宇高株式会社ですけれども、こちらも第3四半期ですが、中国のファインケミカルの合併事業を行うということで、こちらに出資をするためのSPC、特別目的会社を設立したもので、連結子会社の中に入っています。

一方、減少するほうの山石金属ですけれども、こちらは第3四半期ですが、古河機械金属様に株式譲渡いたしました。

それから、持分法適用会社は、1社増です。これは第1四半期に、来年度からのセメントの事業統合に向けて準備を進めるためにC統合準備株式会社ということで設立をいたしました。1月1日付で商号変更を行っており、UBE三菱セメント株式会社となっております。

連結業績に及ぼす影響ですけれども、この統合準備会社において、準備のためのコストが発生します。これは、持分法の投資損益で営業外損益の中で取り込んでくるという部分で影響がございました。

2021年度 第3四半期連結決算



環境要因

項目			2020年度 第3四半期 (A)	2021年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート		円/\$	106.1	111.1	5.0	
資材 価格	ナフサ	CIF	\$/ t	363	673	310
		国産	円/KL	28,800	53,900	25,100
	ベンゼン (ACP)		\$/ t	427	977	550
	豪州炭 (CIF)		\$/ t	77.3	156.5	79.3
			円/t	8,198	17,387	9,189

4

続いて4ページのスライド、環境要因でございます。為替レートは昨年の同期に比べましてやや円安で推移をしてきております。

それから、ナフサ、ベンゼン、石炭の価格はこちらにお示ししておりますように、前年同期に比べるとかなり価格が上がって推移をしてきているところでございます。

主要項目

(単位：億円)

項目	2020年度 第3四半期 (A)	2021年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高 ^{*1}	4,389	4,766 (5,386)	376 (996)	- (22.7%)
営業利益	138	328	190	137.5%
経常利益	105	306	200	189.6%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	89	180	91	101.7%

*1: 2021年度より「収益認識に関する会計基準」等を適用しているため、売上高の対前期増減率は記載しておりません。
()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

5

続いて5ページのスライドですけれども、主要項目、損益項目になります。

売上高は、終わった第3四半期累計で4,766億円、対前年度では376億円の増収です。今年度から収益認識に関する会計基準が適用になっておりますので、従来基準ベースの売上高を括弧で2段表示しております。従来ベースですと5,386億円ということで、996億円の増収ということになっております。

営業利益は328億円、前年同期に比べますと190億円の増益です。率にしますと137.5%になります。経常利益は、実績値が306億円、前年同期比で200億円の増益です。率にして189.6%になります。

親会社株主に帰属する四半期純利益が180億円。前年同期比91億円の増益です。率にして101.7%増益ということになります。

2020年度の上期は、新型コロナウイルス拡大に伴いまして、需要が急減いたしました。これに加えて、昨年度はアンモニアの定修年ということもあり、業績が大きく悪化しておりました。昨年の下期から回復傾向に戻っておりましたけれども、今年度の第3四半期につきましては、10～12月の3カ月間におきましても前年同期を上回るという増収増益の形になっております。

セグメント別 売上高/営業利益

(単位：億円)

	セグメント	2020年度 第3四半期 (A)	2021年度 第3四半期 (B)	差 異 (B) - (A)	増減率
売上高	化学	1,797	*1 2,476 (2,548)	679 (751)	- (41.8%)
	建設資材	2,123	1,614 (2,190)	△ 509 (66)	- (3.1%)
	機械	545	707 (679)	162 (134)	- (24.7%)
	その他	23	24 (24)	1 (1)	- (7.1%)
	調整額	△ 100	△ 57 (△ 57)	42 (42)	- -
	計	4,389	4,766 (5,386)	376 (996)	- (22.7%)
営業利益	化学	15	260	244	-
	建設資材	110	35	△ 75	△ 68.2%
	機械	10	32	21	200.8%
	その他	3	3	0	19.4%
	調整額	△ 1	△ 2	△ 0	-
	計	138	328	190	137.5%

*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

6

続きまして、セグメント別の売上高、営業利益の内訳でございます。

今期は、上期の段階で旺盛な需要を背景として好調に推移する化学部門、他方、内需の低迷や石炭価格の高騰によって苦戦を強いられる建設資材、といった形でセグメントによって明暗が分かれた形になっておりましたけれども、第3四半期も同様の状況が継続しております。より顕著になったとも認識しております。

数字ですけれども、売上高は、化学部門で対前年同期 679 億円の増収です。

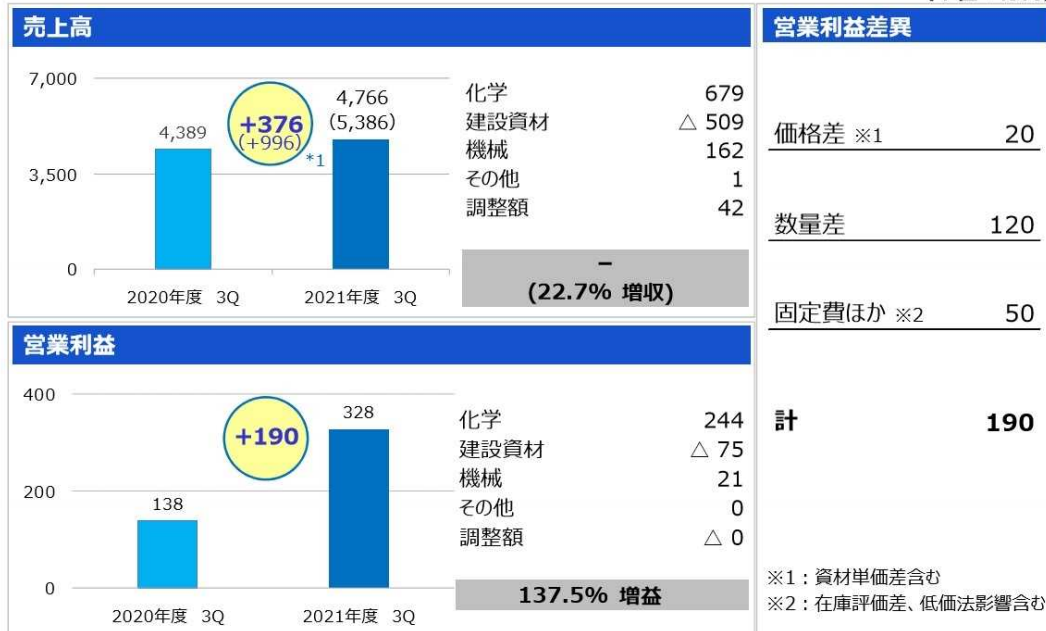
建設資材は 509 億円の減収です。建設資材は収益認識基準の影響が大きいものですから、従来ベースですと 66 億円の増収となっております。

それから、機械セグメントが前年同期比で 162 億円の増収ということで、トータルは先に申しましたように 376 億円の増収となっております。

下の段、営業利益でございますけれども、全体としては 190 億円の増益と申しました。内訳としましては、化学で 244 億円と、大幅な増益。一方、建設資材が 75 億円の減益。機械セグメントが 21 億円の増益となっております。

差異分析 全社

(単位：億円)



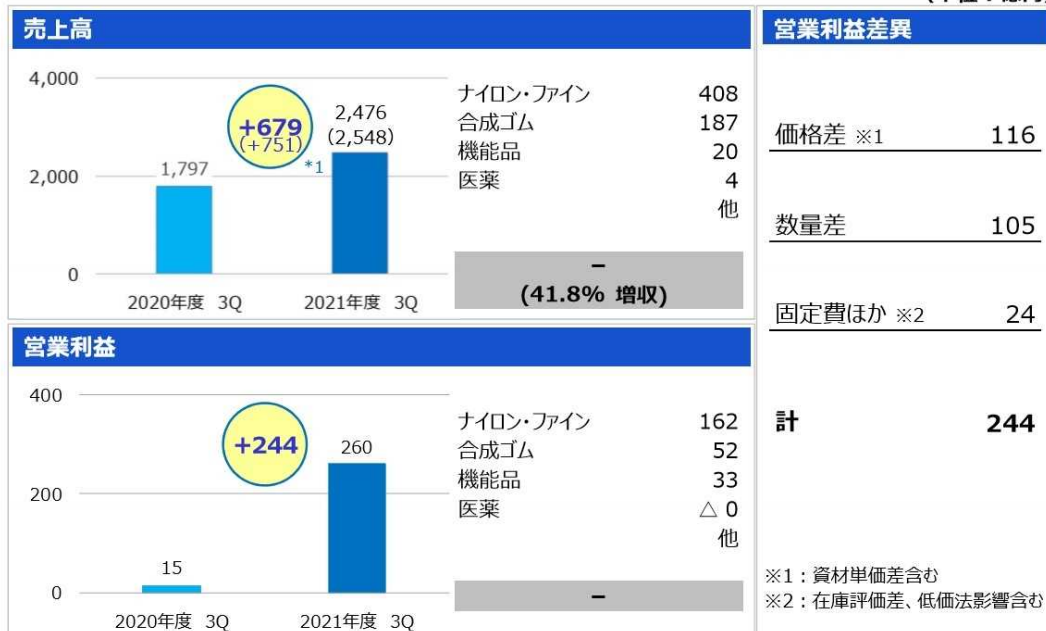
*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

続いて、7ページのスライドでございますけれども、売上、営業利益のセグメント内訳は今ご覧いただいたとおりでございます。

右のほうの営業利益の差異の内訳として、価格差でプラス要因 20 億円、数量差でプラス 120 億円、固定費ほかとしてプラス 50 億円となっております。

差異分析 化学

(単位：億円)



*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

8

続いて8ページ。こちらからセグメント別の内訳のご説明になります。

まず、化学セグメントですけれども、全般的な状況で申しますと、上期において新型コロナ影響が大きかった昨年度から、自動車関連を中心としまして総じて需要が回復してきております。

ほぼ全ての製品で販売数量が増加しています。先ほどご覧いただきましたように、原料価格の高騰はございますけれども、需給の引き締まりを背景にしまして、製品価格の改定を進めることができている状況です。

それから、電子材料分野で、ポリイミドや産業分野向けの分離膜、あるいはセラミックスといった機能品につきましても、拡販が進んでいる状況になっております。加えまして、隔年のアンモニアの定修が今年はないこともプラス要因として働いているところでございます。

資料左のほう、売上高は先ほど申し上げました通り化学部門としては679億円の増収ですけれども、サブセグメントの内訳はここにお示ししたとおり、一番大きいのはナイロン・ファインで408億円の増収となっております。

ナイロン、ラクタムの価格が大きく改善しております。工業薬品につきましても、アンモニア市況が高まってございますし、定修がないということで数量も増加しております。

それから、合成ゴムで187億円の増収です。合成ゴムも価格がかなり上昇しておりますし、数量的にも増えております。

それから、機能品で20億円の増収です。機能品につきましては、電解液の事業が昨年下半年から三菱ケミカルさんとの合併体制に移行し、持分法適用関連会社になりましたので、連結の売上からは外れております。そのマイナス影響がありますけれども、ポリイミド、それからセパレータや分離膜、セラミックスなどの増収が反映されているところです。

それから、医薬につきましては、ロイヤルティ収入、受託品の増収分があります。一方で、自社品の出荷が前年に比べると少ないということがありまして、差し引き4億円の増収になりました。

下の段、営業利益でございますけれども、化学全体としては244億円の増益です。サブセグメントの内訳としましては、ナイロン・ファインで162億円です。これが一番大きなところでございますけれども、ナイロン、ラクタム等のスプレッドが拡大しております。それから、工業薬品についてもアンモニアの定修がないために数量増となり、価格も上がっているといったところで、大幅な増益に寄与しているところでございます。

それから、合成ゴムで52億円の増益です。こちら価格が上がっておりますし、スプレッドが改善しております。特に、第3四半期は原料のブタジエンの価格が下がる中で、スプレッドが拡大して利益が増益に結びついたところでございます。

それから、機能品で33億円の増益です。機能品は、売上のほうで申しあげましたけれども、ポリイミドをはじめとしまして、機能品全般的に拡販が進んでおります。これらの利益増が寄与しているといったところです。

医薬は、損益的にはほぼ前年並みというところです。

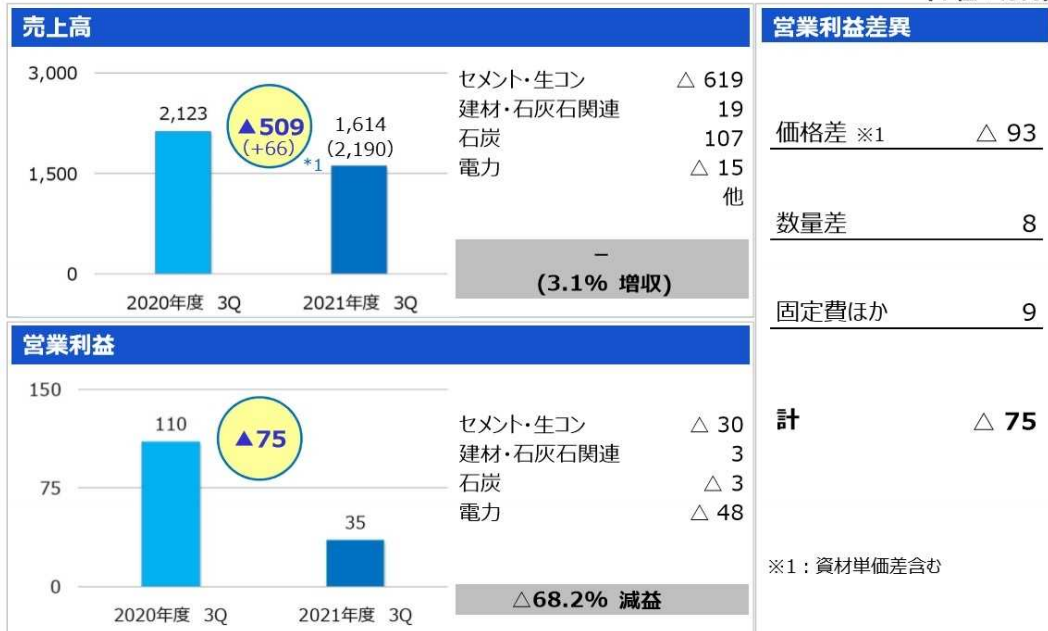
右のほうにございますけれども、内訳として価格差として116億円です。ナイロン、ラクタム、あるいは合成ゴムといったベーシックケミカル系のスプレッドの改善が大きく効いています。

一方、数量差で105億円のプラスがございます。全般的にほぼ全ての製品が数量増になっておりますけれども、中でも機能品等が健闘しているところです。

それから、固定費ほかでプラス24億円ございますけれども、この内、在庫の評価差としてプラス29億円がこの中には含まれている状況です。トータルしまして、244億円の増益で着地をしたというところです。

差異分析 建設資材

(単位：億円)



*1：()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

9

続いて、9ページのスライド、建設資材になります。全般的には売上面でまず会計基準の変更に伴う影響が大きいところがございますので、売上は大幅なマイナスになっております。

今年度、セメントの内需が全般的に伸び悩んでおります中で、長雨ですとか天候要因も加わっております。そうしたことで、国内出荷が低調に推移しておりました。

それから、IPPの隔年の定修を今年度は実施しました。このコストアップが対前年ではございますし、石炭価格の高騰の影響で、セメントやエネルギー部門の事業が大変厳しい状況に見舞われているというのが全般的な状況でございます。

数字のほう、売上高はセグメント全体で509億円の減収になりますけれども、会計基準の影響の大きいセメント・生コンがマイナス619億円です。

それから、建材・石灰石関連は、宇部マテリアルズの製品である鉄鋼や耐火物向けの需要が回復してきております。こうしたところで、この部門はプラスに働いております。

それから、石炭で107億円の増収ですけれども、こちらは石炭価格が高騰しているといった影響が大きいところです。

それから、電力はマイナス 15 億円ですけれども、定修を行ったことで売電の数量が減少しているといった影響です。

続いて、営業利益ですけれども、セグメント全体で 75 億円の減益です。内訳としまして、セメント・生コンで 30 億円の減益です。ここはやはり石炭の価格アップの影響、コストアップが大きいところ です。

それから、建材・石灰石関連は、売上のほうで申しました宇部マテリアルズのカルシア、マグネシアといった製品の売上増がございますけれども、一方でエネルギーコストも上がっておりますので、増益幅は 3 億円にとどまったというところです。

それから、石炭は、やはり石炭価格の上昇に伴いまして 3 億円の減益です。それから、電力ですけれども、こちらは IPP の定修の影響によるマイナスに加えて、原料の石炭の価格の値上がりといった影響が出ております。

右のほうで申しますと、価格差としてマイナス 93 億円です。電力やセメント、宇部マテリアルズ等において、石炭、あるいは油をはじめとした原燃料価格の高騰が効いているところです。

数量差としては 8 億円のプラスです。宇部マテリアルズの需要回復に伴う数量増がここに効いています。

それから、固定費ほかということで 9 億円のプラスです。これは、IPP の定修等を含めてというところでございます。

差異分析 機械

(単位：億円)



*1: ()は「収益認識に関する会計基準」等の影響を考慮しない場合の参考値です。

10

続いて、10 ページのスライドが機械になります。

機械セグメントの全体像としましては、昨年度、新型コロナで落ち込みました自動車関連の設備投資案件等の引き合い、需要といったものも回復基調で今年度は推移をしております。回復の状況に地域差はありますが、中国やアメリカなどでは堅調に回復をしております。

それから、産機につきましては、既受注案件は着実に進捗をしております。それから、サービス事業に関しても受注、売上ともに堅調に推移をしております。製鋼事業につきましては、原料のスクラップ価格が高騰し、高止まりをしておりますけれども、需要のほうは堅調に推移をしているという状況になります。

数字ですけれども、セグメント全体として 162 億円の増収です。成形機、産機、製鋼ともに増収になっております。営業利益も 21 億円の増益ですけれども、こちらも増収に伴う増益ということで、成形機、産機、製鋼事業ともに増益になっております。

右のほう、価格差でマイナス 3 億円、数量差でプラス 7 億円ですが、これらが製鋼事業の数量価格の影響です。固定費ほかで 17 億円となっております。この内、※2 で下にお示ししていますが、機械の限界利益としてプラス 15 億円が含まれています。

営業利益～四半期純利益

(単位：億円)

項目	2020年度 第3四半期 (A)	2021年度 第3四半期 (B)	差異 (B) - (A)
営業利益	138	328	190
営業外損益	△ 32	△ 22	10
金融収支	1	2	0
持分法投資損益	4	△ 8	△ 12
為替差損益	△ 8	6	15
その他	△ 29	△ 23	6
経常利益	105	306	200
特別損益	15	△ 25	△ 40
税金等調整前四半期純利益	121	280	159
法人税等・非支配株主利益	△ 31	△ 99	△ 68
親会社株主に帰属する四半期純利益	89	180	91
1株当たり四半期純利益	88.73円	183.34円	94.61円

11

続いて、営業利益から下の部分でございますけれども、営業利益は328億円と先ほど申し上げました。営業外損益ですけれども、実績値がマイナス22億円。前年同期に比べますと10億円ほど改善している状況です。

内訳はここにお示ししているとおりです。持分法投資損益がマイナス12億円ということで、前年に比べると悪化しております。建設資材関係で、販売会社である宇部三菱セメントの業績悪化や、先ほど申しました持分法で取り込んでくる統合準備会社の統合準備のための費用といったもので、マイナス要因になっています。

為替差損益につきましては、円安に振れておりますので、前年に比べるとプラス15億円となっております。

それらを差し引きしまして、経常利益は306億円です。

それから、特別損益ですけれども、マイナス25億円ということで、前年に比べると40億円ほど悪化しております。

前年は、グループ会社の再編等で、抱合せ株式消滅差益や、あるいは電解液の事業の再編に伴う持分変動利益といった特別利益でプラスが出ておりましたので、前年比ではマイナスが大きく見えています。

最終的に親会社株主に帰属する四半期純利益は 180 億円に落ち着きました。

2021年度 第3四半期連結決算

貸借対照表

(単位：億円)

項目		2020年度末 (A)	2021年度 第3四半期末 (B)	差異 (B) - (A)
資産	流動資産	3,317	3,617	300
	固定資産	4,378	4,321	△ 56
	合計	7,697	7,940	243
負債	有利子負債	2,147	2,157	10
	その他負債	1,743	2,005	262
		3,890	4,163	272
純資産	自己資本 *1	3,590	3,566	△ 23
	非支配株主持分他	216	211	△ 4
	計	3,806	3,777	△ 28
負債・純資産合計		7,697	7,940	243

*1:「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したもの

12

続いて、12 ページのスライド、バランスシート項目です。

総資産は 12 月末で 7,940 億円です。3 月末、前年度末と比べまして 243 億円ほど増加しております。

売上等が増えておりますし、原材料価格が上がっております。こうしたところで、売上債権ですとか棚卸資産が膨らんでいるという状況になっています。

それから、有利子負債は 3 月末とほぼ同じぐらいの水準の 2,157 億円です。それから、純資産の自己資本ですけれども、実績値は 3,566 億円で、3 月末から 23 億円ほど下回っている状況です。

四半期の純利益等ございますけれども、配当金の支払いと、100 億円の自己株の取得を実施しておりますので、こうした影響で 12 月末では 3 月に比べて若干下回っている水準でございます。

キャッシュ・フロー計算書

(単位：億円)

項目	2020年度 第3四半期	2021年度 第3四半期	
A.営業活動によるCF	386	168	税金等調整前四半期純利益 280 減価償却費 271 運転資金の増減 △319 法人税等の支払 △50 他
B.投資活動によるCF	△ 325	△ 276	有形・無形固定資産の取得 △250 他
フリー・キャッシュ・フロー (A+B)	60	△ 107	
C.財務活動によるCF	202	△ 195	配当金の支払 △91 自己株式取得 △100 他
D.現金及び現金同等物の増減 (含、換算差額等)	272	△ 300	
E.現金及び現金同等物の四半期末残高	678	496	

13

続いて、13 ページ、キャッシュ・フローでございます。営業活動によるキャッシュ・フローの実績値が 168 億円です。先ほどバランスシートのところで申しましたように、売上が回復基調でございますので、運転資金が増えているといったところです。

それから、投資活動によるキャッシュ・フローが 276 億円のキャッシュアウト。差し引きしますと、フリー・キャッシュ・フローでマイナス 107 億円となっております。

それから、財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払い、自己株取得で 195 億円のキャッシュアウトです。これらを現預金の圧縮ということで都合しまして、最終的に現金同等物の四半期末の残高は 496 億円で落ち着いております。

第 3 四半期の決算状況は以上でございますけれども、通期の業績見通しは、昨年 10 月 22 日に修正発表いたしました数値を据え置きとさせていただきます。

主要項目 進捗率

(単位：億円)

項目	2020年度 (A)		2021年度 (B)		差異 (B) - (A)	
		第3四半期実績 (進捗率)		第3四半期実績 (進捗率)		第3四半期実績
売上高	6,138	4,389 (71.5%)	6,350	4,766 (75.1%)	211	376
営業利益	259	138 (53.4%)	390	328 (84.2%)	130	190
経常利益	232	105 (45.4%)	335	306 (91.4%)	102	200
親会社株主に帰属する 四半期純利益	229	89 (39.1%)	195	180 (92.8%)	△ 34	91

16

通期の見通しに対する進捗状況は、後ろの参考資料の16ページに掲載しております。

売上高は75%、営業利益で84%、経常利益が91%、親会社株主に帰属する四半期純利益が92%という進捗状況でございます。

営業利益 四半期業績推移

(単位：億円)

セグメント	2021年度					通期予想	進捗率
	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	累計		
化学	76	69	114	-	260	280	93.0%
建設資材	6	13	14	-	35	60	58.5%
機械	7	16	8	-	32	50	64.1%
その他	0	1	1	-	3	4	92.5%
調整額	△ 2	1	△ 2	-	△ 2	△ 4	- %
計	89	101	137	-	328	390	84.2%

18

また、営業利益の進捗具合は、セグメント別の内訳を参考資料の18ページにお示ししております。こちらをご覧くださいますと、化学部門が進捗上振れを牽引していることがご理解いただけるのではないかと思います。

化学事業につきましては、事業環境に恵まれた面がありますけれども、全体的に見ますと当面はこの環境が継続すると見込んでいます。懸念材料や下振れ要因はありますけれども、今後も計画値を上回っていく可能性は非常に高いと見ております。

機械はほぼ計画線で見込んでおりますけれども、建設資材につきましては引き続き厳しい状況が当面継続するのではないかと見込んでおります。ですので、建設資材につきましては、計画からの下振れはなかなか避けられないという見通しを持っております。

ただ、全体としましては化学のプラス要因のほうが大きいと見ておりますけれども、事業環境の不透明な変動要素もまだ多いものですから、現時点で一定程度の精度をもって定量的に見通すということはなかなか難しいこともありまして、業績予想の数値は据え置きにさせていただきました。私からのご説明は以上でございます。

司会：ありがとうございました。

質疑応答

司会：それでは、これから質疑応答に入ります。

なお、ご質問につきましては、一問一答形式でお願いいたします。また、多くの方からのご質問にお答えするために、お一人様1回につき2問まででよろしくお願いいたします。それでは、質疑応答を開始いたします。

では、最初に、A証券株式会社のA様、ご質問をお願いします。

A：A証券のAでございます。よろしくお願いいたします。

藤井：はい、よろしくお願いいたします。

A：では、2点お願いいたします。進捗のお話を伺いましたが、最初にリスクの大きい、建設資材についてです。本来の需要期である第3四半期に利益が伸びなかったことからかなり厳しいと思われれます。

石炭価格の上昇分は第3四半期も原価にしっかり反映されており、第3から第4四半期にかけて会計上の製造原価はあまり上がらない、つまり変動費の受払差はこれ以上あまり悪さをしないような状況になっているのでしょうか。それとも、第4四半期もさらに会計上原価が上昇してくるような形になるのでしょうか。

合わせまして、1月から値上げというお話だったと思いますが、その辺りの状況について可能な範囲でお考えをお教えいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

藤井：まず、石炭価格の会計上の反映ということでございますけれども、ご理解のとおり、やはり在庫を経由してということがございますので、実際にコストとして反映してくるところに多少時間がかかってまいります。そうしたことで、上期に比べて第3四半期のほうが、コストアップ要因が大きかったということになります。

石炭価格ですけれども、第3四半期はいったん急騰しまして、一度中国の価格政策等で多少落ち着きましたけれども、その後、またインドネシアの禁輸の話などで高騰しています。足元もまだかなり高い水準で推移している状況になっております。

こうしたことで、今後、またこれがこういった形で推移するのかという部分もございますけれども、やはり第3四半期から第4四半期にかけてのほうがよりコストアップの要因としては強まってくるのではないかと見ております。

それから、値上げの状況でございますけれども、これもご案内のとおり、1月出荷分からトン当たり2,200円以上ということで宇部三菱セメントが打ち出しをして、需要家のお客様たちと交渉を進めさせていただいております。

一定程度、お客様のほうでもご理解は浸透していると認識しております。具体的な金額、進捗状況は、まだ交渉中ということもございますので控えさせていただきますけれども、鋭意動いている状況でございます。

A: 一定程度浸透ということは、本格的に値段が上がるのは4月からとしても、第4四半期は少し足しになるような形で見てもよろしいでしょうか。

藤井: 今期で少しでも寄与してくれればと期待はしております。

A: 分かりました。ありがとうございます。

二つ目です。化学は、第3四半期は相変わらずかなり好調だったと思います。8ページの図および19ページ、20ページの表を拝見しますと、自動車関連の合成ゴムなどの様々な部材は第3四半期も堅調だったように見受けられます。

自動車の生産調整というお話もあったと思いますが、自動車関連の部材について、第4四半期に急減速するリスクをどうご覧になっているのでしょうか。

また、ブタジエン価格が急落しておりますが、その影響をどう考えればいいのか、第3四半期、第4四半期に分けて考え方を教えてください。お願いいたします。

藤井: まず、参考資料の20ページについては、第2四半期から第3四半期にかけての動きというところだろうと思います。

ナイロン・ファインですけれども、ラクタムチェーンも堅調に推移しておりますが、一つ大きな要素として、硫安の価格が第3四半期はかなり高騰して、プラスが発生しています。

それから、先ほどご指摘がありました自動車関係で申しますと、まずナイロンですが、ポリマーのほうは基本的にはそういった影響はないですけれども、コンポジットのほうでは多少の影響は出ております。それほど大きなものではなくて、限定的なものという認識ではございますけれども、一定程度出ているところです。

それから、合成ゴムですけれども、第2四半期に定修がございましたので、第2四半期と比較すると第3四半期が大きく出るところはございます。

それと第3四半期は、原料のブタジエン価格が下がってきたところでスプレッドが拡大した局面であったということもございます。

需要につきましては、新車の部分についてはやはり減産の影響はあるだろうと思いますけれども、一方で履き替えのほうのセカンダリーが好調でございますので、需要そのものとしてはそれほど特に減少したというような認識は持っていないところです。

A: ブタジエンの価格は足元かなり下がっていますけれども、第4四半期もスプレッドが高いまま推移しますでしょうか。

また、合成ゴムの営業利益ですが、第2四半期では27億円の対前年同期営業増益要因であり、今回は52億円の対前年同期営業増益要因ですので、第3四半期の対前年同期でも25億円のプラスになります。これは主にスプレッド改善の影響なのか、もう少し教えて下さい。

藤井: ブタジエンは、製品価格に反映されるまでのタイムラグで、第3四半期は原料価格が下がり、製品価格はまだあまり下がっていない状況ということでスプレッドが拡大しています。

第4四半期は、下がってきたブタジエンの価格が製品価格に反映されるということで、スプレッドは縮小する方向に出るだろうと考えております。

それから、第3四半期を対前年の第3四半期と3カ月で比較しますと、こちらはやはりスプレッド要因が大きいところです。

A: 第3四半期はそういった理由で出来過ぎだったけれども、第4四半期はその辺りの縮小の状況を踏まえても、冒頭におっしゃったように化学の好進捗の部分は残るだろうというイメージで見てよろしいでしょうか。

藤井: そうですね。おっしゃるとおり、第3四半期は環境的に好調な環境が重なったという部分はあろうかと思っております。そういったところからすると、第4四半期は多少緩やかになるにせよ、計画に比べると上振れが期待できるのではないかと見ております。

A: はい、よく分かりました。ありがとうございます。

藤井: ありがとうございます。

司会: ありがとうございます。次に、B証券株式会社のB様、ご質問をお願いします。

B：B証券のBです。どうぞよろしくお願いいたします。

藤井：よろしくお願いいたします。

B：化学のところで、機能品について教えていただければと思います。

先ほどの方と同じで、19ページと20ページを見ております。機能品で売上高が2Qに比べて13億円増え、利益も13億円増えているということで、かなり好調に見えます。値段が上がっているものがある、非常に限界マージンが高いものが増えているなど、この辺りのご解説をお願いいたします。

藤井：はい。機能品は全般的には収益性は比較的高いものがございます。特に限界利益も高いものがございまして、そういったところでは売上に対して利益の伸びが大きく出てくるところはございます。

機能品は全般に2Qから3Qにかけても順調に増えている部分が多いです。

先ほど自動車関係というお話が出ましたが、セパレータが一部自動車の減産の影響を受け、第3四半期は第2四半期並みでありましたが、そのほかの機能品が伸びております。

特に、ポリイミドが第2四半期はフィルムで調整局面がございましたけれども、そこから回復してきております。それから、ワニスですけれども、スマートフォンでOLEDの採用が増えていることもあって、フレキシブルOLED向けのワニスの需要が拡大しており、売上利益の拡大につながっております。

B：そうすると、第4四半期も同じような利益水準が続くと考えてよろしいでしょうか。

藤井：今、ポリイミドでワニスの増量ということを申しましたけれども、中国のオリンピック・パラリンピックの影響で、前倒し在庫積み増しのためという部分もございます。

そういったことからすると、第4四半期は反動減という部分が多少あるとは思いますが、大きく減少ということではないだろうと見ております。

B：それから、2点目はナイロン・ファインについてです。先ほど3Qは硫安が好調だったというお話をいただきましたけれども、第4四半期にかけて硫安についてはどう見るべきかについて、補足をお願いいたします。

藤井：硫安は、中国で硫安の輸出の厳格化がされて、それによって窒素系の肥料が全般的に値上がりしたという背景がございまして。

ただ、中国は、硫安そのものは輸出を規制しておりませんので、硫安を中国の中で生産して、それがマーケットに出てくるという動きはあり得ると思っています。

足元は多少、そういったことでは価格も落ち着いてきていると見ておりますけれども、ある程度の高い水準で当面は推移すると見ております。

B：急に下がることはなさそういう理解でよろしいでしょうか。

藤井：今のところは、急減まではしないという見立てをしております。

B：はい、以上で結構です。ありがとうございました。

藤井：はい、ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。次に、C 株式会社、C 様、ご質問をお願いします。

C：C 証券、C でございます。よろしくお願いいたします。

藤井：はい、よろしくお願いいたします。

C：私も、資料 20 ページで建設資材についてお伺いしたいと思います。

まず、電力が第 3 四半期で 6 億円増益となっております。IPP において石炭高の転嫁で 3~4 カ月かかると聞いていましたけれども、第 3 四半期としてはこれが転嫁されたと考えてよろしいでしょうか。

そして、あるべきマージンの状況に既に戻ったと考えて良いか、それとも第 4 四半期以降にかけてさらに改善する余地があるのか、ご解説をお願いいたします。

藤井：電力関係の第 2 四半期から第 3 四半期の動きですが、バイオ燃料が少し増えたという部分で量的なプラス要因があります。

それから IPP の場合、原則的には石炭価格は売電価格に反映されますけれども、タイムラグがございますので、石炭価格が急騰している局面ではタイムラグ分のマイナス影響が出ます。

第 2 四半期、第 3 四半期とかなり石炭の価格が高い水準にまで来ましたので、そこのタイムラグに伴う、マイナス要因が縮小してきております。これにより、第 2 四半期よりも第 3 四半期のほうが、マイナス要因が少なかったという要因がございます。

石炭価格がある程度上げ止まった状態となれば、この IPP のところのマイナス要因が一時的な要因としてはなくなってくるということで、通常の利益水準に戻っていき、収益性の水準に戻っていきます。

一方で、石炭価格が今度下がり始めたときには、タイムラグのプラスが現れてくるという見立てをしております。

C：第3四半期の状況としては、通常の収益性、あるべき利益水準に戻っているのでしょうか。それとも、まだ戻っていない状況でしょうか。

藤井：まだ、そういう意味ではタイムラグの影響はなくなっていない、ということです。

C：分かりました。そうしますと、もう少し戻る余地があるということでしょうか。

藤井：はい。

C：分かりました。もう一問お願いします。

資料 20 ページにおいて、石炭で 3 億円減益とあります。石炭事業は仕入販売や倉庫事業と理解していましたが、ここでマイナス要因が出ているのはなぜでしょうか。

藤井：ご指摘のとおり、石炭仕入販売において、仕入れの石炭も売りの石炭と価格としてはリンクするような形の契約にしておりますので、基本的にはここでの損益差異というのはほぼないはずでございます。

ただ、販売の形態としまして、いったん在庫を経由して販売という形になりますので、会計上はそこで評価差が発生してしまうことがございます。

ですので、これは実態ということではなくて、会計上の評価差の影響が出たとご理解いただければと思います。

C：そうすると、ここも今後石炭価格が落ち着けば改善の余地があるということになりますでしょうか。

藤井：はい。戻ってくると思っておりますけれども、それが今期中に起こるのか、来期に持ち越しになるのかはあまりはっきりしないところでございます。

C：よく分かりました。私からは以上です。ありがとうございました。

藤井：はい、ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それでは、そろそろお時間近くになりましたので、以上で質疑応答を終了させていただきます。

なお、本日お受けできなかったご質問につきましては、明日以降、財務 IR 部よりご連絡をさせていただきますので、なにとぞご了承いただきますよう、お願い申し上げます。

最後に、宇部興産株式会社藤井常務、一言ご挨拶をお願いいたします。

藤井：はい。ご説明の中でも申し上げましたけれども、この第3四半期は、化学が事業環境にも恵まれて好調を持続する一方で、建設資材は非常に厳しさが増してくるという結果になっております。

こうした状況は当面継続すると見ておりますけれども、そのほか、自動車の生産ですとか、物流、原燃料価格、あるいは最近ですと、また地政学的なリスク等、懸念材料も多いわけで、不透明感が増しているという認識を持っております。

こうした中で、各事業を取り巻く状況の変化、動向に注視しまして、迅速に対応を図りながら業績予想の確実な達成、またさらなる上積みに向けて努めてまいります所存です。本日はご参加いただきましてどうもありがとうございました。

司会：以上で、電話会議を終了いたします。ご参加、ありがとうございました。

[了]